

中央大学における オープンバッジ活用

「学修成果可視化」ツールとしての特徴を考える

佐 藤 信 行
中央大学 法科大学院教授・
副学長・教育力研究開発機構長

1 はじめに

- 中央大学は、2021年度に一般財団法人才オープンバッジ・ネットワークが発行するオープンバッジの導入実証実験を行い、現在はいくつかの場面で活用している。
- 本学では、オープンバッジを学修成果可視化の有用な手段の一つと考えており、ポートフォリオ等各種の可視化手段と組み合わせた活用を模索している。
- 本日は、本学における学修成果の可視化に関する考え方とオープンバッジの位置づけを中心として、本学の取組事例をご紹介したい。

目次

- 1 はじめに
- 2 予備的情報
- 3 中央大学におけるオープンバッジ利用の現況
- 4 大学における学修成果可視化
- 5 特定分野の学修成果可視化ツールとしてのオープンバッジの利点
- 6 中央大学における工夫
- 7 DP達成度の可視化ツールとしての可能性
- 8 おわりに

1 予備的情報

1.1 中央大学とは

- 1885年英吉利法律学校として創立
- 8 学部（法／経済／商／理工／文／総合政策／国際経営／国際情報）
- 8 大学院研究科（ビジネススクール博士後期課程を含む）
- 2 専門職大学院（ロースクール／ビジネススクール）
- 学生数：32,478人（学部26,669、通信教育課程4,198、大学院1,125、専門職大学院486）
- 専任教員数：725人
- 附属学校：6校（4高校、2中学）
- 卒業生数：612,287人（新制531,669、旧制80,618）

1 予備的情報

1.2 教育力研究開発機構とは

- 2021年4月設置（研究員、事務組織、機構長等で構成）
 - 当初業務はSARTRAS対応。オープンバッジの学内取り纏めも所管
 - 以下のミッション
1. 本大学及び他の教育機関における大学教育の現状についての調査研究
 2. 大学教育の新たな在り方についての調査研究
 3. 大学教育力向上に資する教育の技法及びシステムの開発（学修成果評価とそれに基づく学修者の学修サイクルの改善に資する技法及びシステムの開発を含む）
 4. 前三号の活動を基礎とする本大学の教育の改善に関する提案及び本大学の教員が行う教育活動への支援
 5. 大学教育に関する研修 など

2 中央大学における オープンバッジ利用の現況

▶20種のバッジ

(1) 学部学生を主たる対象とする全学的教育プログラム関連

- 正規科目からなるmicro-credential
 - Faculty-Linkage Program (FLP) 修了証（5種）
 - Global FLP修了証
 - キャリアデザイン・ワークショップ修了証
 - AI・データサイエンスと現代社会修了証
 - 学術情報の探索・活用法修了証

2 中央大学における オープンバッジ利用の現況

▶20種のバッジ（続き）

（2）大学院生を主たる対象とするもの

- 正規科目からなるmicro-credential
 - 大学院理工学研究科副専攻修了証（7種）
 - 大学院文学研究科アーキビスト養成プログラム修了証
 - ISS Square-Certificate of Information Security Specialist
- （3）その他（参加賞、表彰状）
- にほんごサポーター
 - 3大学（関西・中央・法政）共催データサイエンス・アイディアコンテスト

▶いずれも、新しいタイプの学修成果可視化ツールとして位置づけられる

3 大学における学修成果可視化

3.1 可視化をめぐる近時の動き

- 教学マネジメント指針（2020（令和2）年1月22日中教審大学分科会）
- 改正大学設置基準（2022（令和4）年10月1日施行）
- ↓
- 「学修者本位の教育の実現」と、その手段としてのディプロマポリシーを起点とする教学マネジメント
- ◆ 「教学マネジメント指針」からの抜粋
 - ディプロマポリシーは、「学生の学修目標として、また、卒業生に最低限備わっている能力を保証するものとして機能すべきもの」
 - 「学修者本位の教育の観点から、一人一人の学生が自らの学修成果として身に付けた資質・能力を自覚できるようにすることが重要」

3.1 可視化をめぐる近時の動き 教学マネジメント指針からの抜粋

◆ 「教学マネジメント指針」からの抜粋（続）

- ・「把握・可視化に当たっては……学生が、同方針に定められた学修目標の達成状況を可視化されたエビデンスとともに説明できるよう、複数の情報を組み合わせた多元的な形で行う必要がある。」
- ・「各大学が具体的に学修成果・教育成果の把握・可視化に用いることができる情報は、世界的にも標準化されたものが存在しているわけではな」い。
- ・「情報公表の観点からは、当事者である学生・大学であれば理解・活用できる学内の情報としてではなく、学外者であっても理解できる内容・表現」が必要

3 大学における学修成果可視化

3.2 可視化の視点

- 大学における学修成果可視化は、段階を経て高度化・複雑化してきている。
 - これは
 - ①誰に対して
 - ②何を
- 可視化するかのニーズ変化による。

3.2 可視化の視点

3.2.1 誰に対する可視化か

➤ 誰に対する可視化か

- 学習者（学生自身）
- 科目教育提供者（教員）
- 教育課程提供者（学部等）
- 教育システム・環境提供者（大学全体）
- 学生を採用する企業等
- 社会全般

3.2 可視化の視点

3.2.2 何の可視化か

➤何の可視化か

- 課程修了自体 → 学位
- 学位の内実 → 単位数・科目成績
- 母集団における位置付け → GPA
- 個別特定の知識技能の修得（度） → 民間試験成績、資格、学内表彰等
- 課程目標（DP）の達成（度） → ?
中央大学学生・学習ポートフォリオでの
DP到達スコア

3 大学における学修成果可視化

3.3 可視化の歴史的展開

i. 起点

- 学修成果の可視化の起点にあるのは、分野を付した「学位」
- 大学進学率が低い時代においては、学位がほぼ唯一の学修成果表示
 - 旧帝国大学の法科大学卒業生には、弁護士試験・司法官第一回試験・文官高等試験予備試験が免除された。

ii. 学位の内実を可視化

- 修得単位数
- 個別科目の成績

3.3 可視化の歴史的展開

iii. 母集団内での位相を可視化

- GPA
- Latin Honors

e.g. Summa Cum Laude, Magna Cum Laude, Cum Laude

iv. 特定分野の学修成果を可視化

- 特定技能民間試験等との連動
 - e.g. TOEIC, TOEFL, IELTS, MOS, 基本情報技術者, 簿記検定
- 学内表彰や学内資格等

v. DP達成度を可視化

- 改正大学設置基準対応で今後各大学での研究と実装が加速化

3 大学における学修成果可視化

3.4 オープンバッジの位相

- オープンバッジは、まずiv 「特定分野の学修成果の可視化」 ツールとして利用できる
- さらに、v 「DP達成度可視化」 のツールとして利用しうる潜在的 possibility も秘めている

4 特定分野の学修成果可視化ツール としてのオープンバッジの利点

➤ 民間試験等

利点：客観的指標としての社会的認知
欠点：大学が認定するものではない

➤ 学内表彰・学内資格等

利点：大学が独自に認定・表示
学生のインセンティブとなる
欠点：対社会表示として機能しづらい
(基準の不明確さ、公示機能の欠如)

4 特定分野の学修成果可視化ツール としてのオープンバッジの利点

▶ オープンバッジ

利点：大学が独自に設定できる

大学が表示に責任を負うことができる

公示機能が高く、対社会の文脈で可視化しやすい

欠点：基準は依然として不明瞭



これを補う工夫が必要

5 中央大学における工夫

5.1 概要

- 基本は、オープンバッジの利点を最大化し、欠点に対策を講じること
- 現在、初期ルールを設定して運用を開始した段階であり、今後、運用しながら調整する予定

5.2 発行者と対象

- (1) 学長または理事長が発行する証明書や表彰状等
- (2) 各機関（学部やセンター、機構等）が発行する修了証（micro-credentials）
 - a. 正規科目の組み合わせによる質保障があるもの
 - b. 非正規科目であるが一定の質保障制度を伴うもの
 - c. 非正規科目であって質保障制度を伴わないもの
- (3) 各機関が発行する表彰状、参加賞
- (4) 科目担当責任者等各種責任者が発行する努力賞や参加証等
- (5) その他

5.3 基本デザインの統一



5.4 カラーバリエーションの規律



5.4 カラーバリエーションの規律

- 青（中大ブルー）赤（中大レッド）
 - 理事長や学長が発行するもの
- 金銀
 - 各機関（学部、センター、機構等）で発行する修了証や表彰状、会員証など
- 銅
 - 科目担当責任者等各種責任者が発行する努力賞や参加証等

5.5 学内議論の端緒とする

- オープンバッジの発行 자체は大学内のローカルな制度に由来する。
- 継続的に社会に表示する点が特徴
- ここから、その付与を検討する過程自体に、大学内での教育のあり方に係る議論が含まれる。この中には、履修証明プログラム等の社会連携的教育活動に係る議論も含まれる。
- そこには、外部から見ても理解しやすい判断基準等が形成されることが期待される。

6 DP達成度の可視化ツールとしての可能性

- DP達成度を如何に測定・評価・表示するかについては、国際的にも統一的な基準はない。
- 多くの大学では、各科目（や課外活動）について、DPのどの部分に関わりが深いかを係数化し、これらについて個々の学生が修得した単位と成績を係数とし、DP達成度を数値化する試みを行いつつある。
- 中央大学学生・学習ポートフォリオでは、科目ごとに [単位数] × [成績点4～1] × [DP関連度3～1] を計算し、これを科目ごとに4点が最大値となるように換算した値の累積をもって「DP達成スコア」としている。
- このとき、オープンバッジは、そのようにして計算されたDP達成度を対社会的に表示するツールとしても利用できる可能性がある。

6 DP達成度の可視化ツールとしての可能性

- 他方、学生の課外活動を含む各種活動について、オープンバッジを複線的に設定しておき、獲得したオープンバッジの累積をDP達成度評価資料に用いることも考えられる。
- 例えば「国際性の涵養」といったDPとの関係では、正規科目（外国語、国際関係科目、留学等）による学修・単位取得を基礎とするmicro-credentialsとは別に、学内国際交流イベントへの参加、留学生チューター活動、国際寮の役職、ボランティア通訳といった活動にオープンバッジを発行し、その累積を複線的に評価基準に加えること等も考えられよう。

7 おわりに

- 2025年度からはじまる第4期機関別認証評価、その前提としての2022年10月1日施行の改正大学設置基準等から、各大学は、学修成果の可視化について、さらに踏み込んだ活動が求められている。
- オープンバッジは、その有力なツールとなる可能性を有していると考えられる。
- この際、オープンバッジを導入することと同じ程度に、その意味を議論することが重要である。